京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

TRANS

「『翻訳』の諸相」研究会　Newsletter No.16

2005/9/16

お知らせ

◆ 第一研究班が、以下の要領で、第 17 回研究会を開きます。ご参加下さい。

日　時：　2005 年 9 月 17 日（土）　午後 1 時より

場　所：　京大会館　213 号室

報　告：　三浦笙子（東京海洋大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 7 歌第 16 連から第 55 連まで」

◆ 第二研究班の第9回研究会「越境する文化2」が、以下の要領で開かれます。ご参加下さい。

日　時：　2005 年 9 月 20 日（火）　午後 2 時より

場　所：　京都大会文学部新館 8 階　仏文共同研究室

発　表：　中村　翠　（京都大学大学院博士後期課程）「イギリスにおけるゾラの受容」

吉川順子　（京都大学大学院博士後期課程）「フランスにおける極東詩の受容―高踏派詩人と中国詩」

司　会：　永盛克也　（京都大学）

多様なオリエンタリズム

杉本淑彦

ルーヴル美術館展が京都市美術館で開催中だ。有名なものではないが、展覧会名にとてもかなっている絵が、日本に初めて持ちこまれた。初代ルーヴル館長ヴィヴァン・ドノンの肖像画である。ドノンはナポレオン時代を生きた人間で、ナポレオン・ボナパルトを総司令官にしておこなわれたエジプト遠征にスケッチ画家として参加した経歴を持つ。ドノンがルーヴル館長に抜擢されたのは、遠征の英雄として総司令官を描いた彼の紀行文『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』（1802 年）を、ナポレオンが気に入ったからである。

この展覧会には、オリエンタリズム絵画とよばれるものも多数展示されている。展覧会の目玉であるアングルの「トルコ風呂」がその代表だ。全裸の女性たちが丸画面いっぱいに描かれている。「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するためのオクシデントの様式」である、というエドワード・サイードの『オリエンタリズム』の論法をよりどころに、近年、オリエンタリズム絵画は批判の俎上に載せられるようになった。オリエント（女性）を支配しようとするオクシデント（男性）の欲望に基づいているとか、暴力や官能など、オクシデントの隠された幻想が描かれている、という批判である。たしかに「トルコ風呂」はそうかもしれない。

サイード自身は絵画論を展開しなかったが、ドノンのかかわったエジプト遠征に対しては、論難を浴びせている。エジプト遠征は、「近代的かつ全面的なオリエント体験を生み出すことになった」ものであり、「いわば近代オリエンタリズムに可能性を与えた最初の経験である」というのだ。

『オリエンタリズム』は、近代オクシデントのオリエント支配が政治的・経済的なものだけではないことを明らかにした。支配の文化的側面にも踏み込んだ画期的な書物だった。しかし批判も少なくない。サイードの論点を建設的に継承しようとする立場からの批判を一つ紹介しよう。「オリエンタリズム」と同じ誤りをサイード自身が犯しているのではないか、という批判である。つまり、サイードはオクシデントがオリエントのなかの差異を無視したことも論点の一つにするのだが、サイード自身が、オクシデントのなかの差異を軽視し、自分の論に合致しない事例を無視してしまい、その結果、『オリエンタリズム』は「オクシデンタリズム」に陥っている、という批判である。

このような批判を展開した研究に、ジョン・マッケンジーの『大英帝国のオリエンタリズム』（平田雅博訳、2001 年）がある。19 世紀を中心に、オクシデントの絵画・建築・音楽・演劇などの諸芸術が、オリエントからの創造的刺激によって活性化した事実と、オクシデントとオリエントの優劣二項対立にとどまらない多様なオリエンタリズムが存在してきたことを強調するマッケンジーは、つぎのように主張する――「今日オリエンタリズムを批評する人々は、あまりに強引な画一化を冒しやすい。過去に関して一枚岩的で二項対立的なヴィジョンを創り上げることで、彼らが未来のより共感的な基盤に立とうとする、異文化間の関係にしばしば過度の損害を与えてきた。実際のところ、オリエンタリズムは、軽蔑と侮辱ばかりかしばしば賞賛と畏敬にも使われ、無限の多様性を持つものであった」。

サイードは、エジプト遠征に関する報告書・回想録類のなかで累積部数最大の、きわめて重要な一冊に言及しなかった。ドノンの紀行文である。ドノンは、「軽蔑と侮辱ばかりかしばしば賞賛と畏敬」でもってエジプト人とその社会を描いている。たとえば、ムスリム有産階級の生活習慣を懶惰だと批判したそのドノンが、豪奢な邸宅で一夜を過ごした経験に基づき、そのような生活の快適さを発見することもあった。遠征当時のエジプトの支配層、マムルーク所有の邸宅である。ドノンによれば、――「フカフカの美しい寝椅子の居心地良さを味わえる僥倖に恵まれた。そのうえ部屋には、オレンジの花の芳香が漂っていた。密生した樹々のあいだを通ってくるあいだに生気を取り戻した、そんな西風の精が運んできたのだろう。私は、月明かりの庭に下りてみることにした。（中略）無益な比較論を振りかざしての批判のための批判など、やめにしよう。そうすれば、オリエント的享楽には確かに優れた所があることを体験から悟ることができる。私が実際そうだったのだ。この庭には、フランス風の長くて立派な並木道もなければ、イギリス庭園の曲がりくねった険しい小道もない。両国の庭は、体の運動をやむなくおこなわなければならないようにできており、その代償として空腹になり、健康にもなる。オリエントでは、むやみな運動は悦楽の一つに数えられていない。低く枝の垂れ下がったイチジクの樹々の間に座り、冷気とまではいかないが日陰を愉しんだり、オレンジとジャスミンの林の中に張られたり建てられたりしている天幕や東屋に、好きな時に入るぐらいのものだ。（中略）幸福は常に自然と共にある。美しい自然のあるところ、どこにでも幸福がある。トリアノン宮の庭園のなかに幸福があるように、エジプトのイチジクの梢の下にも幸福がある」。

ルーヴル美術館展では、「トルコ風呂」の他にもさまざまなオリエンタリズム絵画を観ることができる。ドノンの紀行文と同じような、サイードのオリエンタリズム批評の射程には入りきらない、そのような絵がないのかどうか、自身の目で確かめられる好機である。

研究会の報告

「テキスト輪読：Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press, 1975.」範囲：第 6 歌第 24 連から第 7 歌第 15 連まで

第6章第29-30連の注で、ナボコフは、8ページにわたり、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて確立された決闘の様式と、プーシキン自身が経験した四度の決闘について、考察をめぐらしている。オネーギンとレンスキイの決闘の顛末が描かれるこの箇所を、ナボコフが『エヴゲーニイ・オネーギン』の山場のひとつと考えていることはいうまでもないが、その理由が、決闘という主題にたいする彼個人の固執と密接に結びついていることもまた、同様に明らかであろう。虚構上の決闘が、予弁法的に、フラッシュ・フォワード的に、（あるいはナボコフ自身の作品に頻出する「未来の回想」の一種として）この作品の執筆から十年ほどのちにプーシキンの死をもたらすことになる、現実の決闘と呼応しているとする読みかたは、副次的な思いつきとして見れば、さほど見当はずれなものではあるまい。しかし、その解釈におかれた強調の度合いは、ある意味で、均衡を失するほどのものとなっている。たとえば、ここで決闘という話題に関連して、読者が、十九世紀ロシア文学における他の代表的な例に話題がおよぶことを予期していたとしても、その種の期待が満たされることはないのである。

ロシアにおける貴族文化の成立とその西洋化の過程を、十七世紀以降、十九世紀中葉までに集中的に生起したものと考えるならば、その歴史的展開の多くのところが、決闘という社会的儀礼の定着および流行の時期とかさなっていることは疑い得ない。そのような視点から評価するならば、決闘は、たんなる侮辱に応じた衝動的な問題解決の手段にとどまるものではあり得ないことになるだろう。政治的、宗教的、社会的な信条や、ひとの生い立ち、由緒ある家系にささえられた矜恃の念など、多面的、複合的な要因が背景となって、この慣例は、特定の階層の特権的行為として重視されるにいたったのである。

一族の名誉と表裏一体化した個人の名誉を保全するという目的をもつものであること、その行為者が貴族階級の一員であるという条件を必要とすることによって、決闘は、かろうじて社会的に容認可能なものとなる。当事者の死という危険を必然的にともないながらも、それはあくまでも儀礼的なものであり、儀式としての高度な様式性（外見的な特質からすれば、演劇性と称してもよかろう）を必要とするものであった。おそらく、なによりも嫌忌されたのは、決闘の申し出をはねつけるという、卑怯未練な態度であって、そうした唾棄すべき悪評にまみれることほどの恥辱はなかったに違いない。また、みずからの命を賭したゲームであるという意味においては、決闘は、賭博（これもまた貴族社会が集団的に魅了されるにいたった因襲の一環をなすものである）の極限的な様態と見なし得るものともなる。退屈と無為にいろどられた日常の相貌が一変して、スリリングかつドラマティックな場面へと凝固し、崇高と呼ばれる美学的価値が現出する一瞬こそ、決闘への投企がもたらすものにほかならないのだ。

文化人類学的な観点に立って、決闘という行為が有する社会性、象徴性のみならず、精神的、形而上学的な側面にまで分析を広げてみるという途も考えられようが、歴史的、文学史的には、決闘が同時代における知識人階級の心性の表象となっているという見かたをとることができる。決闘にまつわる快感を、エロスとタナトスという様相から精神分析学的にとらえるいっぽうで、それを、十九世紀前半という風土のうちに据えてみる試みによって、プーシキンからレールモントフにいたる文学者の系譜に新たな光をあてることは可能であろう。また、トルストイ、ドストエフスキイ、トゥルゲーネフ、チェーホフなどの諸作品に描かれた決闘に言及し、それらと『エヴゲーニイ・オネーギン』の例を比較してみることもできたかもしれない。だが、この作品の註釈者としてのナボコフの関心が、そのような方向に向かうことはついになかったのである。

決闘という主題あるいはモティーフにたいするナボコフ自身の個人的固執は、比較的初期の短篇小説「名誉の問題」——1927年に「卑怯者」という題で発表、のちに最初の短篇小説集『チョールブの帰還』(1930年)に収録——のころからはっきりと示されていた。チェーホフの中篇小説「決闘」(1899年)以来、衰退がはじまったとされる「ロマンティックな主題」が、ここでは1926年のベルリーンという、ロシアの貴族社会とも文学的伝統ともかけ離れた時空に移し換えられている。だが、この作品には、喪失あるいは断絶に起因する懊悩のようなものは、不思議に感じられない。ナボコフは、決闘という因襲をノスタルジアの対象として回顧しているわけではなく、それにたいして感じられる魅力を、みずからのうちに肉化された伝統の証しとして、確固たる紐帯としてとらえているように思われる。『エヴゲーニイ・オネーギン』に描かれた決闘も、決闘によって終止符を打たれるプーシキンの運命も、彼にとっては、客観的に距離をおいて眺めてすませることのできる過去の物語ではないのだ。そのことを、われわれは、後年の長篇小説『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(1941年)、『アーダ、あるいは熱情——ある一家の年代記』(1969年、70年)、さらには自伝『記憶よ、語れ——自叙伝再訪』(1967年)などをも視野に入れつつ、再検討してみる必要がある。

(鈴木　聡)

活動状況

◆ 第一研究班の第 16 回研究会が、以下のように開かれました。

日　時：　2005 年 7 月 2 日（土）　午後 1 時より

場　所：　京大会館　103 号室

報　告：　鈴木　聡（東京外国語大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 6 歌第 24 連から第 7 歌第 15 連まで」

参加者：　秋草俊一郎、芦本　滋、鈴木　聡、中田晶子、三浦笙子、皆尾麻弥、若島　正（以上7名）

（第一研究班16回研究会の発表要旨を、本号に掲載しています。）

後記：

ニューズレター*TRANS* の 16 号をお届けいたします。暑さの厳しかったこの夏ですが、もうじき彼岸花も咲き、風も少しずつ涼やかになってまいります。気持ちよく研究に打ち込める季節がすぐそこまでやってまいりました。（皆尾）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：皆尾）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/